

「ひとの心」

兵庫県観音寺住職 平岩浩文

最近、家庭でも学校でも、社会でも人間教育が置き去りにされ、便利さ第一主義になっているような気がしてなりません。

思いやりの心、慈しみの心、感謝の心、気遣う心、それをもつことのできる人、もっている人、これを「人間性豊かな人」と言うような気がします。

今日の私たちは、自分だけで生きている、自分だけよければという考え方が非常に浸透しています。それが身勝手さを生んでいる、そうした人が増加の一途をたどっている現代であります。お釈迦様の導きの中に「衆生の恩」という教えがあります。

「人はあらゆる生物の恩恵にあずかっていきている。いわゆる、わたしたちは生きているんじゃない、生かされている」ということです。こうした感謝の心を一人一人がもって欲しいものであります。家庭生活の中においても、親が子どもを育てる根幹として、この心をもって接してほしいとねがっています。特に最近の子どもは喜怒哀楽を表に出すことをしない、親から叱られた経験も多くありません。感動、感激を味わう環境になかったということかもかもしれません。人間性が芽生えることにより泣いたり、笑ったり物に感謝したりします。そうした心が、閉ざされた心、乾いた心を潤いのある心に変えていかなければならないのです。

一昔前、人の生死は、大変なことだったのであります。それが今日では、事務的に取り扱われているような気がします。悲しいこと嫌いなこと、煩わしいことがどんどん遠ざけられてしまっています。

ちょっとした心づかい、相手に対する思いやりの心、いたわりの心をもって接すること。そうすることによって人間の眠っている感情、閉ざされている心を開くことができるのではないのでしょうか。